

【大学等・一般の部】最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

思いやりのバトン

埼玉県所沢市 見澤 有美

どういうわけか大事な時に限って熱を出す。中津で過ごした高校時代。県大会出場がかかった大会で39度の高熱を出し、チームに迷惑をかけた。最後の晴れ舞台を台無しにしたことでもう頭の中は罪悪感でいっぱい。悔しくて情けなくて。点滴を受けた中津市民病院でワンワン泣いた。そんな私を救った言葉。

それが「ごめんじゃないよ」だった。

あれから29年。今は関東で看護師として働いている。相変わらずイベントの前になると決まって熱を出す。それでも何とかやってこれた。しかしここ最近穏やかでいられない状況が続く。新型コロナウイルスの感染拡大だ。私の勤める病院でもコロナ患者の受け入れが始まり、現場は激務。患者さんの体位を交換するのにもナースと医師が5人がかりで行う。それが全患者さんとなると午前中に60回以上となり、猫の手があっても足りないほどだった。飛沫防止のための防護服は夏では体感温度が四十度を超える。途中で目眩や吐き気を訴えるナースもいたし、泣きながら防護服を着る姿も見られた。その涙の理由はひとつではない。自分が罹患するかもしれない。大切なひとに移してしまうかもしれない。そういった恐怖もあれば自分ではどうにもできない無力さもある。それは患者さんも同じこと。

「死ぬのが怖い」「傍にいてほしい」「食べさせてほしい」

昼夜鳴り止まないナースコールはまるで患者の叫び。家族に会えない。話せない。ふれ合えない。そんな孤独は患者さんの心を確実に蝕んでいった。

「私たちがいるから大丈夫ですよ」

震える患者さんの手をそっと握る。彼は助かるんだと願った。信じた。祈った。それでもコロナ特有の重症化を抑えきれず、何人もの患者さんを看取った。

だが追い打ちをかけるように院内ではクラスターが発生。それが公になると誹謗中傷やクレームの電話が相次いだ。人殺し。バイキン。死ぬ。つぶれる。そんなひと言が何十倍にもなって心に重くのしかかる。だけど不思議と「逃げたい」とか「辞めたい」と思わなかった。それはやっぱりコロナと闘っている患者さんがいたからだ。両肺が真っ白になっても「生きたい」と言う眼差し。真夜中のナースコールで何度も「死にたくない」と訴える涙。そんな姿を見たら、絶対に、その場を離れるなんて考えられなかった。

しかし、である。クラスターが発生してから2週間後。夜中から咳が止まらないのをおかしく思い、PCR検査をしたところ陽性が判明した。まさかの出勤停止。とにかく家にも落ち着かず、頭に浮かぶのは担当していた患者さんや、迷惑をかけた現場のこと。こんなに気をつけていたのに、こんなことになるなんて。私はただただ布団の中で泣いた。

だが療養中、オンラインで師長さんから「見せたい手紙がある」と連絡をもらった。聞けばそれは全国から届いたという激励の手紙だった。師長さんはそのうちの何通かを読み始めた。すると一通だけ、中津市の小学生が書いたものがあった。

「かごしさん。かかってもごめんじゃないよ」

その言葉を聞くなり、急に胸が熱くなった。かつて仲間にかけてもらった言葉を同じ市内の小学生がかける。何だか偶然にも似た不思議。だけど他者を思いやる心がバトンのように受け継がれている気がした。

あれから半年。今も感染状況は変わらない。しかしコロナ禍に必要なものはワクチンでもマスクでもなく、思いやり。誰もが「かかってもごめんじゃないよ」という気持ちを持てたら、きっと未来は明るい。私もそのバトンを受け継ぐ一人として、このコロナ禍を走り切っていきたい。いつか「あの頃な」と笑える日を信じて。